

義烈両公と他藩

吉澤 義一

みなさんこんにちは。本日は『義烈両公と他藩』ということ考えてさせていただきます。この点に付きましてはいままで色々な先生諸先輩方がそれぞれの論文等研究がなされておりますので、新しい研究成果としてお話しすることはできませんけど、総論として発表されることは無かったのではと思います。そういった意味で、意義深いことなのかなと考えています。資料も細かい字で申し訳ありませんが、目をこらしてみたいと思います。またこの資料を元に『義烈両公と他藩』ということでお話して行きたいと思えます。

まず水戸義公と他藩ということでありまして、まず第一に高松藩の場合を取り上げてみました。高松藩はご存じのとおり親藩でありまして、表高は十二万石となっておりますが、実高二十万石の親藩であります。またこれもご承知のように、高松藩の藩主は水戸義公の兄に当たる方で、頼重という方です。また幕府溜間の大名としての役割も果たしております。高松、水戸両藩の関係でありますけど、水戸藩主義公は兄を越えて藩主になったことを、後々までお詫びの気持ちをお持ちになつていたのですが、晩年になりました兄の子綱條公を水戸藩主にむかえ、ついに悲願を達成したことは皆さんご承知のことと思えます。また高松藩におきましては、二代藩主に水戸義公のお子様を据え、それぞれの子を、それぞれの藩主にするというのが幕末まで続いていきます。もし跡継ぎがいなかった場合は陸奥の守山藩から藩主をむかえることがあったようですが、通例は幕末まで両藩深い繋がりをもつていたようです。頼重公は水戸義公と協力して、父頼房公の意志をついで、色々な事業を行つていたわけですが、特に敬神――神を敬う、尊王――王を尊ぶといった事業に力をいれていたようです。例えば、父頼房が神道家であるのは有名な話ですが、神道の興隆をはかる、あるいは、日本武尊を、頼房公が慕つていた関係から、頼重公も領内において、日本武尊を祀った。敬神においては、以上のような事業をおこなつています。尊王においては、後西天皇の即位式に、将軍になりかわり参列する、また朝儀復興――朝廷の儀式の復興などを幕府に建議したりしました。また御水尾天皇に自作の和歌四百二十首を献上されました。一方、水戸義公も敬神の念厚く、兄頼重公と共に、尊王の心に勤めたようです。あまり残っていないのですが、義公の書のなかで『讚州太守にこたへ奉る詞』というものがあります。讚州太守というのは、もちろん兄頼重公のことですが、こんな言葉が残っています。

きくならく王仁が難波の宮にそへし歌も、御はらからの御事なれば、それもこれもつらぬる枝は、たかきもくだれるも、かうぞあらまほしきわざなんぬる意味を申し上げます、王仁という学者に儒学を学んだ皇太子、応神天皇のお子様ですが、その方が難波の宮に、後の仁徳天皇ですが、皇位を継承の時、父の応神天皇が、聡明である弟に跡を継げと言われたのですが、弟が兄を越えて継承できないと、しかしそれは聞き入れられなかった。それが元で、弟の菟道稚郎子が自殺してしまう話がありまして、身分の高低に関わらず、兄弟はこうあるべきだ、と兄頼重公に詫びていることばであります。これが一つ残っております。また義公のお子様、頼常、高松藩の二代目となりまして、義公の志を継いで動きます。たとえば天皇陵修復の志があつたということで、崇徳天皇陵の修復をされました。また松下見林という学者に御陵の調査研究をさせています。五代頼恭、この方は守山藩からやって来たのですが、このときには大日本史の続編計画がありました。高松の後藤芝山という学者に準備を命じております。しかしこれはいつしか忘れられていきまして、九代の頼恕ですが、これは水戸の武公のお子様で、次男ですが、この頼恕の時代に修史事業が復興するわけです。五代頼恭の志を受け、幕末まで修史事業を行っていたわけですが、結局未完に終わりました。しかし高松藩では義公の志、兄頼重公の志、あるいは両公の父頼房公の志を継いでいったと考えられます。しかし、幕末に至り悲劇がおこりました。水戸におきましては甲辰の国難といひまして、藩主烈公が突然、隠居謹慎を被る、という事件がおきました。このとき高松藩は水戸藩主慶篤が幼かつたため、後見職として補佐役となります。しかしそういう中で、水戸では結城寅寿の台頭などありまして、また高松藩との関わりを深めるわけです。そしてご承知の様に、当時藩内における争いがありましたから、これにより水戸と高松の関係が険悪になって行きます。十代頼胤の頃です。そして十一代頼聡は、大老伊井直弼の娘と結婚します。これは、直弼が烈公の政敵ですから、真つ向から対立し、ますます関係を悪化させてゆきました。そのようななかでも頼聡という人、頼恕の兄ですが、この方は水戸烈公に考えが近い方でして、大政奉還がなされた時には、恭順の態度をとるべきだと、藩主に諫め事をするわけです。そして時の藩主頼聡は大政奉還がなされたとき恭順の意を表わし、高松藩はことなきを得るわけです。義公にとりましては兄が藩主を務める藩であり、兄の子供を水戸の藩主に迎えるといったことから、義公にとりまして非常に縁のあつた藩であるといえるのではないのでしょうか。

次に尾張藩の場合をみて行きましょう。尾張藩は御三家の一つ、六十二万石を擁しております。初代が義直公で、この方は徳川家康の第九子であります。水戸の初

代頼房公が第十一子ですから、水戸義公にとりましては、叔父にあたるわけです。五十一才でなくなり、非常に関係が深いわりに、資料が残っておらず、わずかに残っている資料のなかで、『源敬公誅並序』という資料が残っています。これは甲の詞でありまして、死者の生前の功德を称え、死を悼む文章です。これがわずかに残っている文章です。義公が二十三才の時義直公は亡くなっています。したがって義公二十三才の作と考えられます。内容を見ますと、義直公の人柄でありますとか、亡くなったあとは儒葬にしてほしいという遺言に背き、家臣達が仏式にて執り行ったことに対する批判がかなりの内容をしめております。その中には有名な興廃絶絶の言葉があります。廃れたるを興し、絶えたるを継ぐ、これは義公の一生を通じての精神が序のなかにも現われています。そして二代光友公ですが、この方は神社より寺院を大切にした方でして、水戸義公にとりましては、従兄弟に当たるわけですが、水戸と尾張はこのころから冷たい関係になってくるわけです。

つぎに仙台藩、外様六十二万石との関係ですが、この藩は初代藩主が有名な伊達政宗です。あとから出てきますが、伊達政宗の長男、秀宗は宇和島藩の初代藩主になっております。そして伊達政宗から数えて、四代あとが、伊達綱村になるのですが、このときに水戸とのつながりが出てくるわけです。このきっかけは多賀城碑です。通称壺の碑などと言われております。この碑は元禄二年に松尾芭蕉の『奥の細道』に紹介され、それ以降有名になって行きますけど、関係資料のなかに『伊達綱村宛義公書簡』というものがあります。

然共數年致_二苦勞_一、是程迄成功の書空く反故堆となし申候事無_二本意_一存、於_二水戸_一細工_二杯心得申候家来_一之者_二一申付、刊板成就仕候、陸奥守殿御事御由緒も有_レ之、御懇意之事_二候間、一部令_二進覽_一候、

これは水戸家から伊達家に、扶桑拾葉集をあげようという内容ですが、伊達家には現在には伝わっておりませんが、あげたに違いないであろうと考えられています。陸奥守との特別な関係であげるのでよ、ということなのですが、これは皇室と伊達家は非常に密接な関係がある。といいますのも、綱村の父が綱宗という方ですが、この方が後西天皇の従兄弟にあたるということで密接な関係があり、また水戸家も皇室と密接な関係があったため、皇室を通して両家の関係が保たれたということとです。そしてつぎが多賀城碑の資料であります。

就_レ夫存寄申候、陸奥守殿御領内宮城郡壺之石碑之事、古今其かくれなき碑_二一而候、近来及_二破損_一候由傳承候、御領内之事を外よりケ様之事申候段指出申たる様_二候得共、何卒修復を加へ、碑之上_二碑亭を建、永代迄傳り申様_二仕度念願_二候、

他藩から申し上げるのは失礼だが、破損している多賀城碑を修復し後の世まで伝えてほしい、という念願が書かれています。これは水戸義公の懇願によりまして、伊達綱村が動き、多賀城碑を修復し、歴史博物館の隣に現在も残っております。なおこの多賀城碑に関する『義公書簡』は、明治の頃実在したのか否か、という論争がおこりましたが、近年水戸史学会の但野先生により、実在したとの検証がなされています。そして時代は下りますが、天明五年に北方探検家の木村謙次という方が、出羽三山参詣のあと、壺之石碑の拓本をどうしてもとりたいと、ここを訪れまして、天明五年に拓本をとりました。その記事がどこかになればまちがいはなく事実であると裏づけられます。このように仙台藩におきましても義公との深い関係があります。

次に他藩ではありませんが、幕府直轄領天領の場合です。これも有名な碑であります。那須国造碑と侍塚古墳、これらを総称して車塚古墳といえます。この那須国造碑もまた、水戸義公により修復されました。俗に三大古碑というものがあります。先にお話しした多賀城碑、これからお話しする那須国造碑、あと上野国多胡碑、とありますが、このなかで那須国造碑に義公がどのように関わっていたかと申しますと、『水戸義公年譜』に書かれています。

貞享四年丁卯 公六十歳

夏四月、公就_レ国。

行實・御系圖

秋九月、公至_二馬頭村_一、令_二里正大金重貞者_一、

修_二奈須國造碑_一。是先公聞_下碑碣無_レ古_二於奈須國造_一、而顛廢殆滅_上、歎_レ

之。至_レ是命_レ之。国造碑建立記（後略）

これのだいたいの意味は判ると思いますが、この古碑が倒れてしまつて云々なのですが、これのそもその発見はだいぶ遡りますが、磐城国の円順という僧がここを訪れたとき、土に埋もれたこの碑を発見しそれを大金重貞に伝えまして、水戸義公がこの地を訪れたとき重貞が義公に話しました。それを聞いた義公は大金重貞に命じ、水戸からは佐々宗淳を送り、修復を行いました。その内容は『桃源遺事』に書かれております。

本朝にて、古碑に下野国那須の国造の碑、那須郡湯津上村ほど古き八なし。然るに、今道路に倒れ、人のしる事なし、西山公此事を御歎し被_レ成、御家土佐々助三郎宗淳を遣わされ、地を御買せ、堂を御造らせ、碑を安置なされ、田畑御附、御領内之馬頭村大法院と云山伏を別に遊され候

これもおそらく意味は判ると思いますが、これは佐々宗淳の書状が数多く残っておりますので、詳しく説明しますが、土地を求めて、お堂を建て、そこに碑を安置する。またこれの運営資金のための田畑をあてる。そしてその守りとして馬頭村大

法院に当たらせました。このお堂は三百年たった今でも笠石神社として受け継がれております。いかに新しく立て替えたと云えど、あとを守る者がいないのでは意味がありません。ですから堂守をおいたというのはすばらしい見識であります。その碑文に書かれていることはどういうことかといえますと、韋提と云う人の顕彰碑であります。内容は、この時代、持統天皇の時代ですが、義公はなにかこの韋提到関する資料があるのではないか、ということでも車塚古墳、いわゆる上侍塚古墳と下侍塚古墳がありますが、発掘を命じるわけです。この内容が『那須国造墳墓修築記』にあります。

(前略) 是歳元禄壬申之春、命_二儒臣良峯宗淳_一啓_二発瑩域_一、若有_二誌石_一知_二其名氏_一、則欲_下建_レ碑勒_レ文以伝_中不朽_上也、惜哉有_二惟折刀、破鏡之類_一、而莫_レ有_二銘誌_一焉、於是 蔵_レ仍_レ旧、新加_レ封築_二四周_一、栽_レ松防_二其崩壞_一云

前権中納言従三位源朝臣光圀識

現在でも考古学は非常に盛んですが、出土した物がどこから出て、何なのかを検証する発掘方法、また出土した物を元にもどすという作業、これは現代の発掘方法に照らしてみてもすぐれている。また現代に於いては、出土した物を、その後建物を建てるとか道路をつくるとかでもとに戻せない点等考えまして、非常に優れているということ。現在では栃木県に属していますが、このころ水戸藩領ではありませんが、水戸藩の庄屋大金重貞に直接の現場監督を申し伝え、さらにその監督に佐々宗淳をあたらせたということですから、非常に丁寧にお堂、碑を建てたことがわかります。

次にこれは義公最大の功績の一つである、尼崎藩の場合であります。わたしも最近まで嗚呼忠臣楠子之墓が何藩に属するのか知りませんでした。尼崎藩に属する、ということ。認識を新たにしました。譜代五万石の藩であり、藩主が青山氏、またこのころは二代藩主青山幸利であります。水戸義公が楠公を崇敬していたことはおわかりになると思いますが、この大串元善の『楠公の碑を拝するの文』をお読みいただくとなおのことおわかりいただけると思います。

嘗て本朝の史を成すに志有り。儒臣に命じて修撰せしむ。毎に皇統の正閏・人物の臧否を論じては必ず楠公を推して閏然すべからずとなし、(中略)景仰の深きことただならざるなり。

ことここに至った経過ですが、青山家の方でもお話しがありました。広厳寺という今でも大きなお寺がありますが、千巖というお坊さんが、元禄六年、建碑の意向を水戸に伝えるわけです。それに呼応して水戸でも建碑の事業が本格化するわけです。これも派遣されたのは佐々宗淳であります。元禄五年四月彰考館総裁を拝命

した宗淳五十三才の時であります。主なる目的は碑の建設、そして資料の収集などであります。早速この年宗淳指揮のもと、建設が進められるわけです。これは水戸義公、楠公崇拜の帰結であり、大変大きな事業でありました。その墓碑銘は嗚呼忠臣楠子之墓という有名な銘であります。裏には義公が師と仰いだ明の学者朱舜水の楠公賛が刻まれてあります。元禄五年六月三日に工事が始まりまして、同年十二月二十一日に完了いたしました。この建碑の意味は改めて申すまでもなく、後世の人を感嘆せしめるに至りました。特に真木和泉守や吉田松陰、西郷隆盛などに影響をあたえ、王政復古の決意にいたりました。また福井の、橘曙覧の詠んだ詩のひとつに

湊川 御墓の文字は知らぬ子も 膝折ふせて 嗚呼といふめり

この和歌一つとつても、いかに楠公の墓が広く人々に浸透していたかが判ります。このように、建碑により、幕末に大きな影響をおよぼしたことをみても、建碑は大きな意味をもっていたのではないのでしょうか。これは先年阪神淡路大震災がありまして、覆いはあの地震により倒れたようですが、碑そのものは幸いにも倒れずに残りました。現在も湊川神社の境内にあり、神社に守られながら現存しております。

次に鳥取藩の場合ですが、外様の大名で三十二万石であり、池田家が藩主を務めております。義公が楠公を崇拜したことは申し上げた通りですが、義公が崇拜した人物の中にもう一人、名和長年公がいます。この方のことを、名和公碑を中心にお話ししたいと思います。

名和長年公は、建武中興の立役者の一人で、後醍醐天皇が隠岐に流されたあと、後醍醐天皇を奉迎し、賊を破って、天皇の京都還幸を助けた方です。水戸義公はこの方も、大変尊敬しております。『伯耆巻』という書物があるのですが、これを見た義公がこの本を大日本史編纂の参考にした。また参考太平記を編纂するにあたり、参考にしたわけです。そのなかに書かれている、名和公の事跡に大いに感銘をうけたようです。また森尚謙という方の書物に『故伯耆守名和君碑陰記』というものがありませんが、

我水戸相公篤く 南朝を尚び名和公と志を千載の後に同ふす

南朝の上が一字あいておりますが、当時の水戸流の書き方です。尊敬の意味を込めて、わざと一字あけております。弘道館記などこういう書き方をしています。この一節をお読みいただければ、いかに名和公を尊敬していたかが判ると思います。そして森尚謙に命じて『名和君碑陰記』を書かせたわけです。このことは名越先生や仲田先生が詳しくお知りなところですから、先生方の論文をお読みななれば判る

と思います。そして池田家に関しましては、烈公の五男昭徳という方が迎えられます。十四代、鳥取藩主に就く方でもあります。もちろん烈公のお子様だけに、水戸の精神を良く理解しております。ですから水戸義公、また森尚謙の意志を汲んで、この時埋もれていて、発見された『故伯耆守名和君碑陰記』を完成させたと言われております。これは今でも現存しています。このように、水戸義公から烈公に至るまで、非常に関わりの深い藩であります。

次に、外様七万五千石、小城藩の場合であります。これは義公の書簡が残っております。義公と鍋島元武との書簡のやり取りがあります。義公にとりましては三十四才も年下の藩主であります。特別な親近感をもっていたようです。貞亨三年から元禄三年ころまでの書簡であり、生類哀れみの令の批判なども書かれております。遠くの小城藩との関係は、伊藤修さんが考察されておりますが、水戸、鍋島両家とも後陽成天皇の孫娘の方がお嫁にきています。水戸の場合、近衛信尋の娘、尋子が義公のお嫁にきています。これは後陽成天皇の第四皇子の娘さんです。それから鍋島家には後陽成天皇の第八皇子の娘さんがお嫁にきています。従いまして、水戸家と鍋島家は親戚関係になるわけです。また海外との接点、長崎も鍋島家の領内であったようですから、海外の情報を集めるため、鍋島家に接近したと伊藤修さんは考えられているようです。また皇室を通じての親戚関係も大きな要因と考えられます。こういったことから、今日にも多くの書簡が残っていると考えられます。

最後になりますが、松前藩一万石でございます。この松前家と水戸義公は、直接の交流はなかったようですが、ほとんど外国に近い感覚の、遠い国であったようです。ここに義公は快風丸という船をつくり蝦夷地探検を三回試みています。一回目が貞亨二年、二回目が貞亨三年、三回目が元禄元年に行っております。『桃源遺事』のなかにわずかに記事が出ています。当時他の義公関係の書類を見ても、快風丸についてはたったこれだけしかありません。後世色々な形で出てきますが、当時はこれしかありません。

西山公自然の御用の為に大船を御つくらせ候、是は大難洪濤をもやすやすと渡海仕候様にとの御心也

なぜ幕府の嫌疑に触れるような大きな船を作り、蝦夷地を探検したのか？名越先生や佐藤次男先生の高説をお読み頂きたいのですが、一つにはアイヌの反乱の実態調査、もう一つは地理未開の地、地理、風土、産物などへの関心。さらには源義経が蝦夷地に逃れたという逸話の問題。鎌倉実記では義経は平泉で首を取られたと書かれています。その確認。大日本史編纂にあたっては、史実を十分に確認しなければならぬ、そのための調査も含んでいたのではないかと。私個人としまして

は、それが一番大きな理由ではないかと考えています。いずれにせよ、今挙げた三つの理由からではないかと思えます。あとずつとあとになります。石川桃蹊による『桃蹊雑話』というのがあります。

義公御代寛文六年の頃、荷舟の大舟を造らせらる。この比船手頭は村島与十郎、船頭は玉井源六となり。船の間数は知れざれども、積み乗せたる荷物に依りて考れば、大都五百石積の船なるべし。其後又大船を造らせらる。是を快風丸と名付けさせ玉ふ。(後略)

快風丸と名付けられたのは、後のことですが、これにより蝦夷地のことが、ある程度詳しくもたらされます。実際快風丸は一回、二回と奥地には行けませんでしたが、三回目には石狩川流域ですね、上流の方まで行き、蝦夷人がおどろいて船のそばまで千人位寄ってきたということです。豊田天功が何を根拠にこのようなことを書いたのかわかりませんが、実際このようなこともあったかも知れません。これらのことは松前藩とは直接関係がありませんが、義公と他藩との関わりという点において、ご承知おきいただきたいことでもあります。

それでは次に水戸烈公と他藩ということと話をして行きたいと思えます。実は烈公におきましては、他藩との関係が多くて、調べるのが大変でございます。烈公の血縁、また実際の政治の場においての関係など非常に多くの関係があると思えます。先ず烈公の子女の関係からひもといてみます。まず烈公は非常に子沢山で二十二人に十四女、三十六人のお子様がいいます。この資料には早逝した方は載せておりません。五郎曆までずっと男の子がいけません。これらは皆早逝しているわけです。

・賢 姫 宇和島藩主、伊達宗城と婚約中没

・松 姫 盛岡藩主、南部利綱室

(・税 姫 助川館主、山野辺義正室)

(・慶 篤 第十代藩主、順公)

・昭徳(五郎曆) 鳥取藩主、池田慶栄の養子、藩主慶徳

・昭致(七郎曆) 一橋家相続、徳川宗家相続、第十五代將軍

・昭融(八郎曆) 川越藩主、松平典則の養子、藩主直候

・昭休(九郎曆) 忍藩主松平忠国の養子、後、岡山藩主池田慶政の養子、

藩主茂政

・八代 姫 仙台藩主、伊達慶邦室

・昭音(十郎曆) 浜田武成の養子、藩主武聡

・昭繩(余一曆) 喜連川藩主、喜連川宣氏の養子

(・昭訓(余四曆) 京都守衛)

- ・茂姫 貞子 有栖川熾仁親王妃
- ・昭嗣(余六磨) 島原藩主、松平忠愛の養子、藩主忠和
- ・昭邦(余七磨) 土浦藩主、土屋實直の養子、藩主拳直
- (・昭武(余八磨) 慶篤の養子、第十一代藩主、水戸藩知事)
- ・愛 姫 下総国高岡藩主、井上正順室
- ・昭則(余九磨) 会津藩主、松平容保の養子、後、旧守山藩松平家相続
- ・昭鄰(廿二磨) 守山藩主、松平頼升の養子、守山藩知事
- ・正 姫 鹿野藩主、池田徳澄室

これらが烈公の血縁関係による他藩との関係であります。

次に政治上においての、他藩との関係をお話しして行きます。まず最初に、福井藩の場合であります。この福井藩の藩主は、松平春嶽公、のち徳川慶喜將軍の時代、政治総裁職に、元治元年には京都守護職にもつく方を中心に話をしてゆきま
す。この松平春嶽公は藩主に就く時水戸烈公を尋ねています。これは松平春嶽公の『真雪草紙』を見ますと詳しく記載されています。天保十三年に襲封するわけですが、この少し前にたずねています。

天保十二三年の頃、靱負勝手掛となる。江戸に出府せり。靱負著東後、一日余の前二出つ。余はほこりかほ二、水戸景山公、御藩臣へ被_レ示候御教訓と御著述の御書籍を他より借用し、余ミつから写したるを靱負に見せたり。余は褒めらるゝ積也。靱負のいはく、水戸公は現今の明君なり。公も亦水戸公の如く、御心を国事に被_レ為_レ用、明君とならせられん事を奉_レ願といふ一言八、実二余の幸福ニして今ニ於_レ而忘れざるなり。

これはずっと晩年の回顧録であります。これを見ますと、烈公を手本に藩政改革を行っていたことがよくわかります。水戸藩、烈公、福井藩との関係をみてみますと、一番明瞭に現われているのが、藩校明道館の教育であります。この明道館の建設にあたり、明道館記を創るわけですが、実はこれは水戸弘道館記を下敷きにつくられています。と言いますのも、春嶽公が水戸烈公に襲封のまえに教えを乞うています。非常に信頼が厚い。また家臣においても中根雪江という方が、水戸の藤田東湖を非常に尊敬している。また鈴木主税という方も、藩政改革に力があった方ですが、この方も藤田東湖を尊敬している。また橋本景岳という人通称佐内ですが、この人も東湖に心服している。佐内は江戸に来て色々な人に会ったが、格別自分の目を覚ます様な人に会っていないが、しかし藤田東湖は立派な人だということなのです。この橋本景岳が中心になって、明道館記を作成して行く、また明道館の教育においても中心的

役割、校長先生のような役割を果たして行くわけです。ですから福井藩に於いては、藩主、家臣皆水戸を手本として藩政改革を断行し、また教育も行っていると考えられます。また明道館記を見てみますと、弘道館記と非常に類似している所がありまして、たとえば水戸では文武不岐と書かれています。福井では文武相資となっていたり、学問事業その功を異にせずに対しては政教一致、忠孝死二に対しては上下誠一でしょうか、このように全体の構成、館の目的、藩祖の功績などの構成なども非常に類似している。何人かの学者の方もこの類似性について考察しておりますが、明らかに水戸の弘道館記を下敷きに作られているようです。先ほどの人間関係をみても、それは当然なのではないでしょうか。ただ明道館独特なのは、洋警の急です。これは多分に時代背景からくる外圧が切羽つまったことから、西洋に明るい橋本景岳の先見性であります。

次に薩摩藩、外様七十二万石の場合ですが、これも藩主、家臣ともに親しい関係であります。薩摩藩十一代島津斉彬公、嘉永四年に四十二才の時、烈公の推薦により藩主に就任しております。將軍継嗣問題の時は一橋派として活躍しました。そしてペリー来航の時には西郷隆盛を介し、將軍を一橋慶喜にと説得に奔走しました。この斉彬公島津家の資料として、烈公の書簡が沢山残っています。そしてこの斉彬公も烈公の人格、見識ともに厚い信頼、期待を持っていたようです。藩主もそうですが、藩主の意を体して藩を導いた西郷隆盛もまた、藤田東湖を尊敬していたという事です。やはり橋本景岳と同じ時期に江戸に出た西郷隆盛も藤田東湖を訪ねたようです。その東湖を訪ねた時、なにか清水を浴びたような清々しさを感じ、帰る道を忘れるくらい清涼とした気持ちになったという事です。藤田東湖からも非常に信頼を受けていたといわれています。また烈公も大変敬慕し、烈公のためなら戦場の埋め草になっても良い、という気概をもつて国事に奔走していたようです。このような事例を理解するためには『水戸藩史料』の『島津斉彬建議』を調べますとわかります。これはペリー、プチャーチンの来た頃の建議であり、これにより斉彬公の烈公に対する思いがわかると思います。

当時、御年輩と申し人望と申し、異国之事情委曲に御会得被_レ為_レ在候は、水戸前中納言之外は被_レ為_レ在間敷と奉_レ存候間、海防之儀御委任被_レ仰出_一候様、乍_レ恐奉_二念願_一候、此度之儀は、天下之御一大事御座候間、彼を知り己を知る後之御処置に無_二御座_一候而八、必勝之御良策は行届間敷奉_レ存候間、能々御評議之上被_二仰出_一候様奉_レ願候云々

この建議はこの一大事を水戸烈公にまかせてほしい、と言ったものです。この当時、日本中探しても海防の準備が全くなされていなかったため、この国難を任せら

れる人物は水戸烈公しかいない状態であり、各藩主もまた烈公を推す行動にでまして、この斉彬公もまたその中心人物でありました。これら各藩、また幕府要職等の推薦を受け、嘉永六年いわゆる海防参与に就任するわけです。斉彬公の建議が大きな意味をもっていたといえます。このようにその後の藩主同士の書簡による親密な関係、また家臣における藤田東湖、西郷隆盛の親密な関係、西郷は東湖の精神を我が精神として国事に奔走したと言えます。偕楽園の好文亭に床柱がありますが、これは薩摩の斉彬公から贈られた孟宗竹であります。また園内にキリシマツツジがあります。これもたぶん贈られたものです。

次に長州萩藩の場合です。これは外様三十六万石であります。当時は十三代毛利敬親が藩主でした。これは藩主同士の関係というより、吉田松陰との関係を中心にしていきます。松陰が水戸に来ていたのは嘉永四年から五年にかけてですが、会澤正志斎の塾や豊田天功の自宅を訪問し、教えをうけたようです。水戸の人は他藩から来た人を非常に歓迎してくれて、思っていることを包み隠さず話してくれる。良い意見だなと思えば年下の意見であっても熱心にメモをとると松陰先生は書いておられます。そして今私が勤める新莊小学校は豊田天功の屋敷跡でありまして、色々な縁を感じるのですが、その豊田天功に關しましては、学問が広く、議論していても非常に痛快である。人がびつくりするような議論をする、と印象を述べております。そして長州萩に帰り、色々勉強したが、日本という国を始めて知った、日本は皇国、天皇の国だ、これを知らなくて国事が行えようか、と深く反省しまして、その後猛烈に国史の勉強をしまして、国事に奔走しました。その後の活躍は申すまでもありません。この松陰が『景山公壁書』として、烈公のことを書き、また松下村塾にて印刷し門人等に配ったものがあります。その内容は、

飯を得る毎に兵糧の粗々敷を思ひ、衣を得る毎に甲冑の窮屈を思ひ、起居の安きに山野の苦を思ひ、父母妻子同居し兄弟親族と交はるに、遠国離居の時の悲嘆を思ひやりて、今日の無事安穩を大幸とせば、何ぞ奢りの念を生ぜん

非常に苦しい状態を思えば、いまの現状は無事安穩で幸せであると考えれば、奢ることも無いであろう、といった意味であります。これを配ることにより、水戸の精神を長州に伝えたくわけです。また抜文として烈公のやることを手本としなければならぬと書いております。これも烈公の政策、考えというものが萩に伝わった一例であるといえます。また『東北遊日記』嘉永四年～五年の日記ですが、此れも読んでみますと

近世水府の景山公の諸政を更張するや、他邦より来りて法を取るを期せられし故、他邦より来りて其の政を問ひ、其の法を觀んと欲する者あれば、必ず胸襟

を開き、情実を吐て是に示し、又其論説する所を取て国政に施用せられしと聞く。実に志ありと云べし。余近日諸藩の政を為す者を観るに、大抵目前の計を為すのみ。未だ天下後世の為に志を立つる者を見ず。

これは会澤正志齋に見た感想と同じ、年下の者でも良い意見があつたら国政に反映して行く。実に志がある。それに比べ、最近の諸藩を見ると、この時代の実態でしようか、目先のことしか考えていない。今だに天下国家の為に働く人を見たことがないと述解しております。長州藩とは藩主同士のつながりは無かつたようですが、吉田松陰によつて水戸の精神が純粹に伝えられていました。

あまり時間が無くなつてきたので残りは主なるところを簡単に説明申し上げます。

久留米藩、有馬家二十一万石の場合ですが、会澤正志齋の門人、真木和泉守によつて水戸の精神が伝わっております。この真木和泉守は天保十五年でしようか、水戸遊学を行つております。この真木和泉守は大変慕つておりまして、どんなに病気が重い時でも、楠公の祭りは欠かさなかつた、また明治維新の大まかな写真を作つたことなどで知られております。

次に宇和島藩十萬石の場合です。伊達宗城、伊達政宗の長男の血統です。これは今でも沢山の書簡が残つておりまして、やはり烈公と同志として親交のあつた人です。

土佐藩の場合でも山内容堂が烈公と親しい関係にありまして、同志として外庄のこと、幕府の外交政策、藩政改革色々なことを質問していたようです。なお烈公はアメリカに渡つたジョン万次郎に会い、アメリカの政治経済等について直接聞いたという記録もあります。そして坂本竜馬は自らの刀の鞘に、東湖の漢詩を刻みまして心の支えにしていたと伝わっています

次に佐賀藩外様三十五萬石、鍋島閑叟の場合ですと、烈公を崇拜して、家臣に水戸遊学を勧める、また自身も水戸に遊学し、水戸の精神を佐賀藩に伝えております。

次に宇都宮藩の場合ですが、譜代七万七千石であります。大橋訥庵という人物がおりまして、常に烈公を当代随一の人物と尊敬しております。しかし時間の関係上詳しいことは割愛します。

つぎに豊岡藩、鳥取藩、笠間藩の場合ですと、それぞれ藩校がありまして、豊岡藩、現在の兵庫県であります。ここに稽古堂というのがあります。豊岡藩の藩士が佐藤一斎という幕府の学者、この方は弘道館記を作るとき意見を聞いた幕府の学者ですが、この方と親交のあつた猪飼敬所という方がいまして、この人が佐藤一斎

から弘道館記を送られたようです。それを手本に稽古堂建学にあたり稽古堂記を作ったようです。鳥取藩の場合ですと、藩校尚徳館がありまして、尚徳館記というものがあります。もちろんここは烈公の五男昭徳が藩主として迎えられ、進めていった事業であります。また笠間藩の場合ですと譜代八万石であります。ここには時習館というのがあります。会澤正志斎の教えが伝えられています。土浦藩の場合ですと、土屋家譜代九万五千石であります。烈公の十七男が藩主に迎えられ、後に大坂城代になります。プチャーチンも京都に近い大坂に船を入れれば日本中皆腰抜かすという思惑があったようですが、さすがに烈公はそれを見抜いていまして、親戚の土屋家を置きそれを見事に跳ね返します。

また松前藩の場合ですと、蝦夷地は侵略を頻繁にうけ、非常に危険な状態であり、こと此処に至った原因の一つは松前藩の責任もあり、国の為に重要な土地のため、松前藩だけに任せておけない。幕府直轄、場合によっては烈公自身が赴き、家臣を定住させ蝦夷地を守るといった気概をみせた土地であります。

以上主なる藩を取り上げ検証しましたが、このほかに関係した藩があるかと思えますが、一応代表的な十三の藩を検証しました。多少大雑把な所があったかと思いますが、ご容赦いただきたいと思えます。なおもう一つお配りした資料。『藤田幽谷を中心とした水戸の学統』があります。これは幽谷の門人の広がりがあります。主なる人物では藤田東湖、会澤正志斎、豊田天功などですが各々烈公の意志を体し、教育また藩政に尽力して行きました。このことから烈公の意思そのものといつては言いすぎでしょうが、そのほとんどがこの学統に伝わっております。その系統がわかるようにとお配りいたしました。

人といい、政治といい、幕末の各藩の目指す所は水戸藩であり、その淵源をたどると水戸義公であり、義公が種を蒔き、歴代藩主が意志を継ぎ、特に烈公に關しては暴風雨のなかを耕し、明治維新として花開かせるといふことでもあります。やはり根本には学問、識見、実行力があつて、はじめて正しい改革が出来るのではないかと思えます。なかなか粗雑でありましたがお話しを終わります。

（平成十二年十月一日講座）

（水戸市立新荘小学校教諭）